

# 食中毒事例 1

■事例 20歳代 男性

■経過

6月3日友人と居酒屋で飲酒、レバ刺し、鳥刺しを食べた。

6月5日39°Cの発熱が出現、近医を受診、かぜ薬を処方された。

6月6日深夜から発熱に加えて腹痛、水のような下痢が始まり、10回以上トイレに通った。仕事は休んだ。

6月7日熱は37°Cになったが、便に血液が混じるようになったため、病院を受診した。

# 食中毒事例 2

■ 60歳代 女性

■ 経過

2月4日自宅でカキなべを作り、家族と一緒に食べた。

2月5日朝から吐き気、嘔吐、腹痛とともに水のような下痢が始まった。熱はなかった。下痢は激しく、トイレから出られない状態だった。

2月6日絶食していたら、下痢の回数は減ってきたが、だるくて、動けなくなったため、家族が心配して病院に連れてきた。

# 下痢への正しい対処法

## ■ 自分のために

脱水を防ぐため、スポーツ飲料などを飲む  
1日1.5~2リットルは必要  
口から飲むのも点滴  
固形物は無理に食べなくてよい

## ■ 家族のために

ヒトにうつさないようによく手を洗う

# 医療機関にかかるタイミング

- 具合が悪いときほど医療機関を受診すること  
1日10回以上の下痢、血便、嘔吐、  
強い腹痛、38℃以上の高熱
- 下痢で最も恐ろしいのは脱水から腎や心臓などの臓器にダメージを受けること

# 食中毒の治療

## ■ 症状に対して

脱水に対して点滴

腹痛や嘔吐を和らげる薬を使う

(使いすぎは禁物)

## ■ 抗菌薬

重症の場合、初期に短期間使う

O157に対しては日本と海外で意見が  
分かれる

# O157の特徴

- 潜伏期が長い 2～8日（平均3～4日）
- 小児に多発 特に5歳未満
- 激しい腹痛と血便がみられるが、発熱は低率
- 小児では溶血性尿毒症症候群の発症率が高い（5～10%）
- 死亡例は高齢者に多い
- 抗菌薬の使い方について意見が分かれている  
国内では病初期短期間の使用推奨、海外では禁忌

# 腸管出血性大腸菌感染症の性別・年齢別・ 症状別報告数2005年

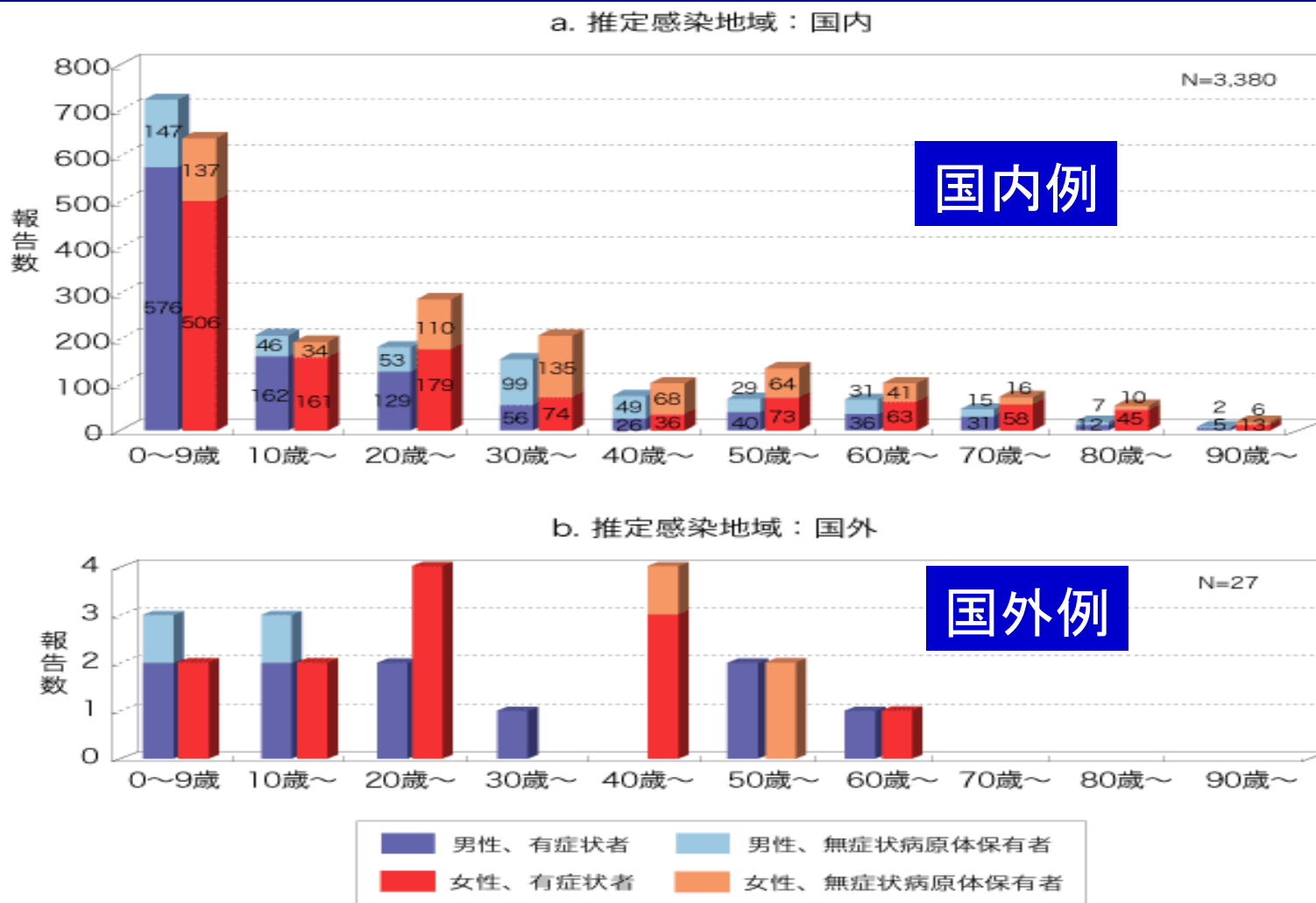


図4. 腸管出血性大腸菌感染症の性別・年齢群別・症状別報告数（2005年）